道元における信

られたものであるから、知及び行と信との比較検討をも行なっていて知と信との、また道元において知は行(宗教体験)に裏付け性質を持ち、如何なるものとして表現を得ているか。この事につ道元の思想、宗教において信は如何なる位置を占め、如何なる

げられる。

みたい。

法眼蔵』のほとんど全巻に亙っており、論理的思考を極限まで突修飾などない。こうした論理の追求を徹底するという 点 は、『正によって論理の極限まで追い詰め、突き詰め、そこに全く無駄な般的な難問題である存在と時間について有時や而今といった言葉法眼蔵』によって知られる。「有時」の巻など、西 洋 哲学でも一法眼蔵』によって知られる。「有時」の巻など、西 洋 哲学でも一法眼蔵』のほとんど全巻に亙っており、論理が過去でいる。

れる。

いう面である。「弁道話」に、「……、さらに焼香・礼拝・念仏・もう一つの特長は、「只管打坐」を中心とする厳しい自力の行とき詰め、極めて精緻な徹底した論理によって尽されている。

半

田

栄

間が仏の絶対的真理として、その只管打坐に現成する。只管打坐得よという。身心脱落の正当恁麼時、我も宇宙も、全存在、全時よ。」とあり、ひたすら坐禅する事に徹底して、身心脱落の体験を修懺・看経をもちゐず、ただし打坐して身心脱落することをえいう面である。「弁道話」に、「……、さらに焼香・礼拝・念仏・いう面である。「弁道話」に、「……、さらに焼香・礼拝・念仏・

越え、宗教的真理の体験の世界に入るという関係にあると考えらを誤る事なく正しい方向に導き、その究極において論理の極限をこの二つの面は、徹底した論理の追求により実践(只管打坐)がその自力の行の中心である。 「只管打坐」がその自力の行の中心である。

「即心是仏」に、「しかあれば、すなはち即心是仏とは、発心・それでは道元における信は如何なる形で存するであろうか。

言葉で表現できないであろう。

起こすといったものでもなく感応動交によって、即ち諸仏の仏果地心をおこすこと、かならず慮知心をもちゐる。……この慮知心にあらざれば、菩提心をおこすことあたはず。この慮知心にあらず、必があれども、感応動交するところに、発菩提心するなり。諸仏とさは慮知心、もとよりあるにあらず、……、無因性にあらず。しかあれども、感応動交するところに、発菩提心するなり。諸仏を協の所授にあらず、みづからが所能にあらず、感応動交するに発心するゆへに、自然にあらず。」とある。現実に菩提心をおこすなは、菩提心するゆへに、自然にあらず。」とある。現実に菩提心をおこすなは、菩薩の所授にあらず、みづからが所能にあらず、感応動交するにといするゆへに、自然にあらず。」とある。現実に菩提心というようなものでもなく感応動交によって、即ち諸仏の仏果とさは、一般にある。

そのものが信の当体であろう。菩提に裏付けられた、絶対的な、正にその時に起こる。発菩提心

只管打坐、坐禅の修行についても 同 様であろう。「弁道話」に、只管打坐、坐禅の修行についても 同 様であろう。「弁道話」に、いるない。

体験そのものが信だと言えよう。只管打坐は仏祖の悟りに基づく。ままの全存在として現前するという。坐禅による宗教的(絶対的)なり、尺虚空、ことごとくさとりとなる。ゆゑに……、よく仏向上の法を激揚す。」と ある。坐禅における自受用三昧の功徳を述上の法を激揚す。」と ある。坐禅における自受用三昧の功徳を述上の法を激揚す。」と ある。坐禅における自受用三昧の功徳を述また、同じく「弁道話」において、「もし人一時 なりといふとまた、同じく「弁道話」において、「もし人一時 なりといふと

て断絶せず、発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あらず、て断絶せず、発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あらず、て断絶せず、発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あらず、て断絶せず、発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あらず、て断絶せず、発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あらず、不断絶せず、発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あらず、現実の行られたもの故、始めも、終わりも、隙間も、限りもない。自己は仏法の真理(悟り)の中で、それに裏付けられて修行しているとすがここにあろう。現実の行として悟りや真理は現成しているとすがここにあろう。現実の行として悟りや真理は現成しているとすがここにあろう。現実の行として悟りや真理は現成しているとすがここにあろう。現実の行として悟りや真理は現成しているとすがここにあろう。現実の行として悟りや真理は現成しているとすがここにあろう。現実の行として悟りや真理は現成しているとすがここにあろう。現実の行として悟りや真理は現成しているとすがここにあろう。現実の行として悟りや真理は現成しているとすがことはなる。また、『学道田・とのを行いるとは、との表に、初心の表に、を行いまない。

で一致する。 とする者を言うのである故、師に対する信と坐に対する信はそことする者を言うのである故、師に対する信と坐に対する信はそら、次に仏祖や師匠に対する信についてだが、正師とは坐禅を専ら 験としての行持道環が信の当体であろう。

師と弟子が一つになることによって、即ち、師から弟子へでなく、とあり、嗣法は、只管打坐による絶対的体験、身心脱落によってなり。……仏の印証をうるとき、無師独悟するなり、無自独悟すなり。このゆへに、仏仏証嗣し、祖祖証契すといふなり。……」の時法する、これ証契なり、これ単伝なり。このゆえに無上菩提に嗣法する、これ証契なり、これ単伝なり。このゆえに無上菩提に嗣法する、これ証契なり、これ単伝なり。このゆえに無上菩提に嗣法する、これ証契なり、これがある。

に仏を、真理を見る道元にも如実に見ることができるであろう。

15 | 道元における信

述べる。行持において、諸仏とわれらは一である事、そうした体

あればすなはち、千年万年、百劫億劫といへども、この面授これ師から師へ、弟子から弟子へと行なわれる。「面授」にも、「しか

行持によりて、この道環の功徳あり。」とあって、行持道環 を 述よりて、諸仏の行持見成し、諸仏の大道通達するなり。 われらがれらが行持見成し、われらが大道通達するなり。 われらが行持に

の上に行なわれるのであり、 また、「諸仏諸祖の行持によりてわ行持道環なり。」とある。 我々の日常の行も、 仏祖の修行・悟り

べ、われらの行持と諸仏の行持は共に裏付け合い、一つであると

それが信の当体であろう。体的人格)に仏が現成する。ここでも嗣法や面授の正当恁麼時、釈迦牟尼仏の面現成授なり。」とあるように、師や自分(現実の具

これが信だと言葉で表現することはできず、これを分別知の立場 のが信ということになる。そうした、絶対的体験の中においては、 心脱落の絶対的体験そのものが信であると言えよう。修証そのも る師そのものが信の当体と言えよう。言いかえれば只管打坐即身 現実の行、只管打坐(仏の真理に裏付けられた、証上の修、修証 うな神・仏といったある対象を信仰するような信はない。むしろ 重きを置き、強調している。「三時業」では業が 果 報として現わ じ、明らめれば悪趣を脱する功徳があるとするが、ここでは信に 信因果」では因果の理の歴然たるを論じ、因果を否定すると悪趣 験としての信の当体からは程遠いものとなってしまろであろう。) の立場での信は何か対象を信仰する信となるし、道元の絶対的体 別知 (凡見) で信をあからさまに語るところは希である。 (分別知 れを語ることを極力嫌い、『正法眼蔵』においても、そう した分 で客観的に自覚化した時、初めて言葉で信を語れるが、道元はそ に落ちるが、因果の理を仏祖の伝えるものとして、これを深く信 一等、只管打坐即身心脱落としての)そのもの、仏が現成してい 以上、道元の信の諸相をまとめると、キリスト教や浄土教のよ 「深信因果」、「三時業」、そして、「生死」が 挙 げられよう。 「深 そうした中でも例外的に信をあからさまに語っている巻として、

> 信心の立場と言うべきものであろう。 き強調する。この二巻において見るものは論理の立場と言うより、脱し、天界に生まれることができると述べ、ここも信に重きを置け入れ、懺悔し、善業を修することにより、悪業が消え、悪趣を業の理、因果の理を仏祖の道として信じ、希望を持って喜び、受業の理、因果の理を仏祖の道として信じ、希望を持って喜び、受れてくる時によって三つあり、それが三時業なのだが、この三時

『正法眼蔵』全体の中でも、特に信ということを印象づけるの

「生死」の巻であろう。
「生死」の巻であろう。
「生死」の巻であろう。
「生死」の巻であろう。
「生死」の巻であろう。
「生死」の巻であろう。
「生死」の巻であろう。
「生死」の巻であろう。
「生死」の巻であろう。

死を悟ったとは言えない。凡夫の分別や小さい自我を捨てて無我まの生死が即、仏で、生死を厭うたり執着するようでは、真に生仏と言っても、この現実の生死の他にあるのでなく、ありのま

こほるへき、」

信をあからさまに正面から強調して表現している。を投げ捨ててしまう他力の念仏とは全く異なるが。この部分は、まざる持続によって悟る道元の行と、最初から絶対者の前に自我他力の信心と同じものと言える。ただし、厳しい坐の修行のたゆなって絶対者におまかせする態度は、法然、親鸞の念仏宗の絶対死を透脱し仏になるという。ここにおける、自我を捨てて無我にのときに、こちらから力を入れなくとも仏の方から行なわれて生のときに、こちらから力を入れなくとも仏の方から行なわれて生

> てなく絶対一如の関係にあると言えよう。 でなく絶対一如の関係にあると言えよう。 でなく絶対一如の関係にあると言えよう。。 は、においては、知も、証上の知、真理がそこに絶対現成したいるという事においては、知も、証上の知、真理がそこに絶対現成したいるという事にあるとして、悟りの真理がそこに現成しているものだという事であるとして、信りの真理がそこに現成しているものだという事であるといるという事においては行と全く異ならぬ。知と行と信は別々でなく絶対一如の関係にあると言えよう。

それでは先に示した「生死」等三つの巻はどうなのであろうか。

信(ある対象に対しての)ということを、あからさまな表現を以行って客観的に語るのは初心の修行者や在家者に対して説く際に行って客観的に語るのは初心の修行者や在家者に対して説く際に行って客観的に語るのは初心の修行者や在家者に対して説く際に行いる点からも推測されると思う。その点から早い時期のものではなかろうか。道元においては、大衆(初心者・在家者)の教化において語られる、ある対象に対しての信と、出家者の本格的な修行(只管打坐の実践)、それにおける絶対的体験、悟り、空、1。 この坐禅に対する信は、あからさまという程ではないが、かなり強く信を表現しており、やはり大衆(初心者等)に対する教化を目的とするものであろう。『正法眼蔵随聞記』に見られる、「知識者しなと云ふは蝦呱蚯蚓ぞと云はゞ、蝦蜒蚯蚓を是ぞ仏と信じて、……」人と云ふは蝦呱蚯蚓ぞと云はゞ、蝦蜒蚯蚓を是ぞ仏と信じて、……」仏と云ふは蝦呱蚯蚓ぞと云は、、場破いのとなる大変口調が似ることのできぬ信の当体との、二つの相がみられると考えられる。

のは、かなり強く信を強調しており、大衆教化を目的とするもので

2 道中1不11迷惑1、……、乃学道之本基也」(大久保道舟編『道元禅師 全集』下巻、筑摩書房、二六〇頁による)の部分。 中村元『東洋人の思惟方法』三、中村元選集第三巻、春秋社、昭 「修11行仏道1者、先須」信11仏道1。 信11仏道1者、須」信14自己本在11

3

和四八年、一七九頁。

(4) との点について、中村元博士はインド人あるいはシナ人は日本人 と逆で、具体的(個別的)人格において見る信は価値の低い、入口 に追求してみたい。 これは道元(日本人としての)にも当てはまると思うが、今後さら としての信であり、抽象的真理、法に対する信は価値の高い信とし ていると述べられている(中村元、前掲書、一八〇—一八一頁)が、

『正法眼蔵』のテキストは、「生死」は大久保道舟編『道元禅師全集』、 を使用。傍線は筆者による。 は、寺田、水野両氏校註の日本思想大系『道元』上・下、岩波書店 春秋社を、「弁道話」は衛藤即応校註の岩波文庫版を、 その 他の巻 (はんだ・えいいち、日本倫理思想、中央大学大学院)

*